

歩くぞなもし城下町 — 松山市街地のフィールドトリップ、
平成 21(2009)年度「地理学特論 (地理学臨地実習)」「地域環境学臨地実習」の覚え書き —

香川 貴志
(京都教育大学)

Let's Walking around the Historical Castle Town: A Memorandum of Field Trip in Matsuyama City

Takashi KAGAWA

2009年11月30日受理

抄録：本論文は、筆者が偶数年に担当している表題科目群が、奇数年である平成 21(2009)年に臨時的な措置によって開講されたことを受け、その実施内容を備忘録としてまとめたものである。これまでの香川(2003、2005、2007、2009)と同様に、授業内容を簡潔に書き残しておくことで、今後同様の授業を設計する際、コース立案や授業実施に向けて多くの示唆を与え得る資料となろう。

キーワード：フィールドトリップ、地域調査、城下町、温泉、松山

I. 本稿の目的、奇数年開講の経緯、ならびに調査地（実習地）の選定

本稿の目的は、通常の毎週開講科目とは異なる集中実施科目、しかも学外での野外実習と不定期実施の事前学習会の双方を実施する科目について、その運営実態を記録することにある。過去に残した同様の記録に基づいて、本授業科目の実施内容は細かな部分が年々改良されてきており、実施記録が授業改善に大きく貢献している。

ところで、本授業科目は原則的に偶数年に実施される隔年開講科目である。こうした科目でありながら平成 21(2009)年度は、奇数年でありながら開講することになった。その経緯には、次のような京都教育大学の課程改組が関係している。

京都教育大学の入学者選抜試験は、平成 18(2006)年 4 月入学生から教育職員免許の取得が義務付けられていない総合科学課程（いわゆるゼロ免コース）での学生募集を停止し、学校教育教員養成課程に一本化された。団塊世代の教員が退職することで教員不足が生じるという事態を受けて、数年前からとりわけ小学校教員の募集枠が拡大し、その傾向は今後も数年は継続すると予測されている。そこで京都教育大学は中学校教員も含めた義務教育教員の養成に力点を置く改組を実行したが、一方で平成 21 年 3 月に卒業できなかった 4 回生にとっては、新年度に 5 回生となってから卒業が益々厳しいものになった。すなわち、新しい学生募集以降の科目群が学校教育教員養成課程にシフトしたものへ徐々に移行していくため、卒業に必要な単位を未取得の場合は、当該科目が廃止されて受講登録できない事態が起こり得る。

こうした状況を鑑みて、教務委員会から各学科に対し、改組前の入学者（平成 21 年度の場合は 5 回生以上）の取りこぼし科目を洗い出し、卒業保障を視野に入れた特別開講や科目代替の措置が求められた。社会科学科の地理学分野に設置されている「地理学臨地実習」、環境学コースに設置されている「地域環境学臨地実習」も特別開講が必要な例であり、平成 21(2009)年度の 5 回生以上が少しでも早く卒業できるよう臨時的措置として奇数年開講を決定した。

調査地(実習地)の決定に際しては、「地理学特講」は 3 回生に受講希望者が多いため、2 回生担当科目の「地理学概論」の講義中に希望調査をするケースが多かった。ただ、今回の場合は、前年度の現地実習を道南で実施したため、極度に遠方には出掛けない方針を早めに立てた。その後、候補地を愛媛県松山市、山口県萩市、岐阜県高山市の 3 箇所に絞り、最終的には宿泊施設の確保がし易いことを勘案して、調査地(実習地)を担当者の判断で松山市に決めた。テーマは「城下町の都市構造と現代都市の魅力づくり」とした。

Ⅱ. 予備登録、受講登録から事前学習会の設定まで

シラバスに掲載した内容にしたがって、4月の新年度開講日(4月9日)、担当者の研究室前掲示板に予備登録用紙を掲出した。予備登録の受付期間は、従来の経験に基づいて一週間とした。所定の期間中に26名(うち1名は教員免許取得に関わる大学院生)が集まった。現地実習では、事前学習を別に行う大学院科目「人文地理学特講」の受講生も合流することを勧告して、「地理学特論」「地理学臨地実習」「地域環境学地実習」の3科目での受講生数の上限を20名に設定していたため、この時点では3割の定員超過である。また、大学院科目「人文地理学特講」の受講希望学生は5名であった。こうして予備登録学生は学部と大学院を合わせて31名となったが、例年およそ1~2割の学部学生がキャンセルするため、定員超過は許容範囲内であると判断して全員の受講を認め、教務課に受講希望学生の名簿を提出した。

受講希望学生の科目別内訳は次のとおりであった。今年度の対象学年が2~4回生である「地理学特講」が22名(2回生:男3名、3回生:男9名・女6名、4回生:男3名、大学院1回生:女1名)、今年度の対象学年が5回生以上である「地理学臨地実習」が3名(5回生:男2名、6回生:男1名)、同じく対象が5回生以上の「地域環境学臨地実習」が1名(5回生:男1名)である。学部の課程改組を受けて臨時的に奇数年開講したものの、実際は5回生以上の受講希望学生は少なく、実質的には偶数年に開講している科目の補完を果たすと判断できよう。もっとも、学校教育職員免許の取得に必要な科目の選択幅が小さいことや、道南を対象地域とした昨年度の同じ科目に多くの受講希望学生が殺到し2回生の受講を断った(香川 2009)ことからすれば、上記の「補完」にも相応の意義があったと考えられる。事実、今年度15名を数えた3回生の受講希望学生の約3分の2は昨年度に受講を辞退してもらった学生諸君であった。このように総勢31名の学部生・大学院生で授業を始めたが、事前学習会を進めていくうちに「地理学臨地実習」を受講していた5回生男子学生がキャンセルしたため、最終的に松山での現地実習に参加したのは学部生24名と大学院生6名(うち1名は学部開講科目「地理学特論」で登録)であった。

事前学習会は4回を設定した。第1回が平成21(2009)年5月13日の3限、第2回が5月27日の3・4限、第3回が6月24日の3・4限、第4回が7月22日の3・4限である。なお、以下の本稿で日時を記す場合、特段にことわりがない限り、全て「平成21(2009)年」を省略する。ところで、事前学習のコマ数は全部で7コマ(14時間)となる。これに現地実習での8コマ(16時間)を加えて2単位となるようにした設計は例年通りである。

また「人文地理学特講」を受講する大学院生には、学部生を対象としたこれら全ての事前学習会への参加を求めたが、現職教員の大学院生に配慮して原則的に夜間開講になっている京都教育大学大学院では、日中に非常勤講師として学校現場の教壇に立つ者も多い。そこで、参加できない大学院生のために数名のグループを構成して事前学習会への参加に代わる作業を課した。作業内容はコース立案、資料収集、宿舎の確保など現地実習実施に向けての実務的なものである。こうした授業実施は個別対応が求められ担当者にとっては負担が重いが、教育関連の仕事に就く限り同様の職務は必ずこなさねばならないため、むしろ大学院生からは評判が良い。もちろん、大学院生たちは都合がつく限り学部の事前学習会に参加してくれた。

Ⅲ. 事前学習会での活動内容

1. 第1回事前学習会

第1回事前学習会は、5月13日(水)の3限に実施した。野外実習(地理学ではエクスカージョン、フィールドトリップ、巡検などと称されることが多い)が初めての受講生も多いため、最初にシラバスにしたがって趣旨説明をした。次いで事前学習の意義や進め方の方針などを述べたが、事前学習会において受講生全員に課す論文紹介は例年通り受講生に大きなプレッシャーをかけたようである。第1回事前学習会の直後から、教室での質問だけでなく、Eメールを使った質問も多く寄せられた。

「最近の若い学生は・・・」とは言いたくないが、ごく一部の熱心な学生を除いて、学術専門誌やそれに類する書物に掲載された論文を探す能力は著しく低下している。文献検索や収集の方法を知らない学生は決して珍しくなく、CiNiiなどのネットワーク検索で探し物にフィットするものが見つからなければ諦めてしまうケースも多々ある。こうした学生には、むしろアナログ的な文献目録での検索を勧めている。キーワード検索では見過ご

されてしまう関連文献を見付ける喜びを知った学生は、少なからず文献収集の楽しさに目覚める。今回の受講学生においても、文献目録を活用して論文を探し当てた諸君の方が相対的に本格的な学術論文、啓蒙的であっても地誌的に意義のある文献を選んでいられる。いずれにせよ、ネットワークを介しての文献検索は、時間に余裕がある学生時代にとって功罪・長短の両面を持つものではなからうか。指導する立場の者は、自分が既に研究分野を固めた境遇で「狭く深く」仕事をしている場合が多いこと、かつて自分も多くの資料や文献と相対する中で成長したことを忘れてはならないし、学生に対しては苦勞無しでは素晴らしい文献に邂逅できないことを伝えていかなければならない。

第2回以降の事前学習における論文紹介に関しては、人数の多さにも配慮して「レジュメは一人あたりA4で1枚以内」「発表時間は長くて10分」を目指すよう指導した。プレゼンテーションの指導をせずに論文紹介をさせると、配布資料は分厚くなり、口頭発表ではその棒読みになってしまうのが常である。

ただ、第1回事前学習会で第2回以降の発表割り振りは決められなかった。水曜日の午後は原則的に講義が設定されていないため、しばしば「教職セミナー」等が実施され、事前学習会に欠席者が目立つからである。そこで、研究室前の掲示板に、事前学習で紹介を希望する論文を受講生が先着順で書き込めるようにした。これにしたがって、第2回事前学習会以降の発表者が徐々に決まっていっていった。

また、第1回事前学習会では、現地集合・現地解散の旨も告げた。現地集合に間に合うように松山入りするためには、各種の交通機関でいつ京都を発てばよいのか、運賃・料金はどの程度なのかなどについても話した。投宿する宿については、この段階では現地実習の参加者が不安定で予約が難しいため、相部屋とシングルルームのいずれを希望するのかを尋ねるに留めた。宿舎のタイプは、例年通り相部屋を希望する者が多かったため、3~4名で一部屋となる旅館タイプに仮決定した。受講生のうち1名の男子学生が一人部屋にこだわったが、近くの別宿に宿泊してもらおう可能性、一人部屋の追加料金を支払ってもらおう可能性について話し、本人に了解してもらった。

2. 第2回事前学習会

今年度(2009年度)は、各所で新型インフルエンザが予定を狂わせたが、京都教育大学もその例に漏れなかった。当初は5月27日の3・4限に予定していた第2回事前学習会が、新型インフルエンザの学内感染拡大に伴う全学休講措置のために中止になった。この中止分を新たな日程の補講措置でカバーすることも模索したが、受講生と担当者のスケジュールとの関係でそれが叶わず、やむなく順延ではなく中止とした。第2回発事前学習会で論文紹介を予定して受講生には、掲示板やEメールで連絡をして、第3回または第4回事前学習会へのシフトを打診したが、学部生3名が上手く日程調整できず論文紹介に至れなかった。これらの学生については、現地実習の初日の集合時に後述する課題を持参するように伝えた。

3. 第3回および第4回事前学習会

第3回事前学習会は6月24日の3・4限に実施した。ここでは8名の受講生から論文紹介をしてもらった。取り上げられた論文は、本稿の末尾に添えた参考文献リスト(姓名のアルファベット順)で記すと、荒木一視(2000)、片山才一郎(1961)、菊池一夫(2003)、國原幸一郎(2005a)、松岡恵悟(2001)、白石喜春(2007)、寺谷亮司(2007)、山脇秀元(2005)である。これらの論文の多くは本格的な学術論文であるが、紹介する論文は受講生に先着順で研究室掲示板の用紙に書き込ませたため、比較的新しい学術論文が早目に予約された状況を読み取れる。分野は都市地理学と歴史地理学が目立つ。

第4回事前学習会は7月22日の3・4限に実施したが、ここでは14名が論文紹介をしたこと、現地実習の直前ゆえに事務的な連絡などの諸注意をしたこともあり、実質的には5限まで及ぶ長丁場となった。取り上げられた論文を第3回の場合と同様に列挙すると、フंक・カロリン(2000)、城所哲夫・片山健介(2007)、川久保篤志(1996、2006)、窪田重治(1992)、國原幸一郎(2006)、松岡恵悟(2002)、森征洋・林宣之(2003)、向井浩司(2008)、関戸明子(1994)、高橋治郎・山崎哲司(1992)、立田浩之(2004)、和田耕治(2008)、安倉良二(2007)である。これらには、本格的な学術論文だけでなく、隣接分野の論文、啓蒙的な論文も含まれており、対象地域も松山平野だけでなく周辺地域に及んでいる。分野的には、都市地理学、商業地理学や農業地理学が多い。

以上に列挙した論文は、本稿末尾の参考文献リストの一部である。論文紹介を経ずにリストに載っているものは、担当者(香川)が事前学習会の中で紹介したり、現地実習における説明の際、参考にしたものである。とりわけ、藤目節夫(1999)と村上節太郎(1975)は、新旧の地形図を対比させながら松山市街地とその周辺についての都市発達を解説したもので、第4回事前学習会で配布(欠席者には個別配布)したリーフレットに、その写しを綴じ込んだ。この2つの論考については、前学習会で論文紹介ができなかった3名の学部学生に対して記述内容の要約をレポート課題として与えた。また、このリーフレットは現地実習にも持参させたが、裏表紙には1/25,000および1/10,000地形図の一部(松山市中心部)をレイアウトした。1/10,000地形図は1/25,000相当に縮小したため、単純に等高線が多ければ地図が見やすいわけではないことが説明できたばかりか、現地実習でフィールドを歩く際に重宝した。

4. 大学院「人文地理学特講」での事前準備

この科目は、数年前から本稿のタイトルになっている学部科目と共通実施しているが、学部の事前学習への参加だけでなく、現地実習の企画立案から実施に至るまでの各段階で様々な作業課題を与えている。これは、先述したように、将来教壇に立ったときに求められる校外活動の運営能力を磨くための試みである。今回は、学部生が収集しきれなかった文献の補完的収集、現地実習でのプラン作成、宿泊施設の確保など、多くの作業を課した。活動内容で不十分なところは、どういう部分が不足しているのかを個別に指導した。たとえば、現地実習のプラン作成では、原則的に月曜日は見学が不可能な博物館は他の曜日に見学する必要があること、荷物を持ったままの長い距離の移動を可能な限り避けることなど、プラン作成の際の盲点になりそうな部分を注意した。また、宿泊施設の確保については、当初から道後温泉での宿泊を希望していたため、温泉地での宿泊価格を抑えることに腐心した。男女別の部屋割、成績評価物を持参する担当者の個室確保など、様々な制約に配慮しながらの細かな作業は、少なからず大学院生の血肉となったはずである。

なお、昨年度(2008年度)の道南では現職教員の大学院生にリーフレットの作成を命じたが、今回は現職教員の大学院生が参加しなかったため、リーフレットは担当者が作成し、作成上の留意点を大学院生に伝授した。先述した裏表紙への地図掲載もその一つである。また、現地実習への参加者がリーフレットを忘れないようにする工夫として、集合場所や現地での行動計画を綴じ込むことにも触れておいた。

IV. 現地実習の実施

1. 第1日目(8月9日)

講義室で実施される通常の集中講義との重複を避けるため、本授業科目は可能な限り所定の集中講義期間に実施することが要請されている。そこで今年度は、8月最初の集中講義期間である8月6～11日の間において、8月9日(日)～8月11日(火)の3日間で現地実習を行うことにした。盆の帰省ラッシュの兆しが出始める時期ではあるが、担当者がオープンキャンパス業務で8月8日に大学に出勤しなければならないという事情もあり、このような日程となった。

集合場所と時間は、昼食を済ませたうえでJR松山駅の待合室付近に12時20分とした。当初は10時30分を集合時間にしていたが、京都を発つ時間が非常に早くなってしまったため、京都駅を8時過ぎに出発して「のぞみ1号」と「しおかぜ5号」の乗り継ぎで無理なく到着できるようにした。当日はかなりの荒天になってしまい、JR予讃線は八幡浜～宇和島で運休が生じるほどであった。自動車に乗り合わせてくる2グループ(計7名)が遅刻する旨、担当者の携帯電話に連絡してきたが、彼らにも当日の行動予定はリーフレットで告知済みだったので、合流場所を電話で指示して、残りの者が集合した時点で現地実習を始めた(図1)。

前日より前に四国入りしている者を除いて、集合時に多くの者は大きな荷物を持っているのが明白だったため、JR松山駅からは道後温泉駅まで伊予鉄道市内線で移動し、まず宿舎に荷物を預かってもらう計画どおりに動いた。伊予鉄道市内線の乗り場では、かつてJR駅付近は市街地の外であったこと、城下町を起源とする現代都市の多くでは同じような場所に駅があること、高齢社会への対応として車輛がバリアフリー化されていることなどを説明した。一般の乗客との乗り合わせになるため、車内での説明は避けたが、近くに居る者から質問を受けたと

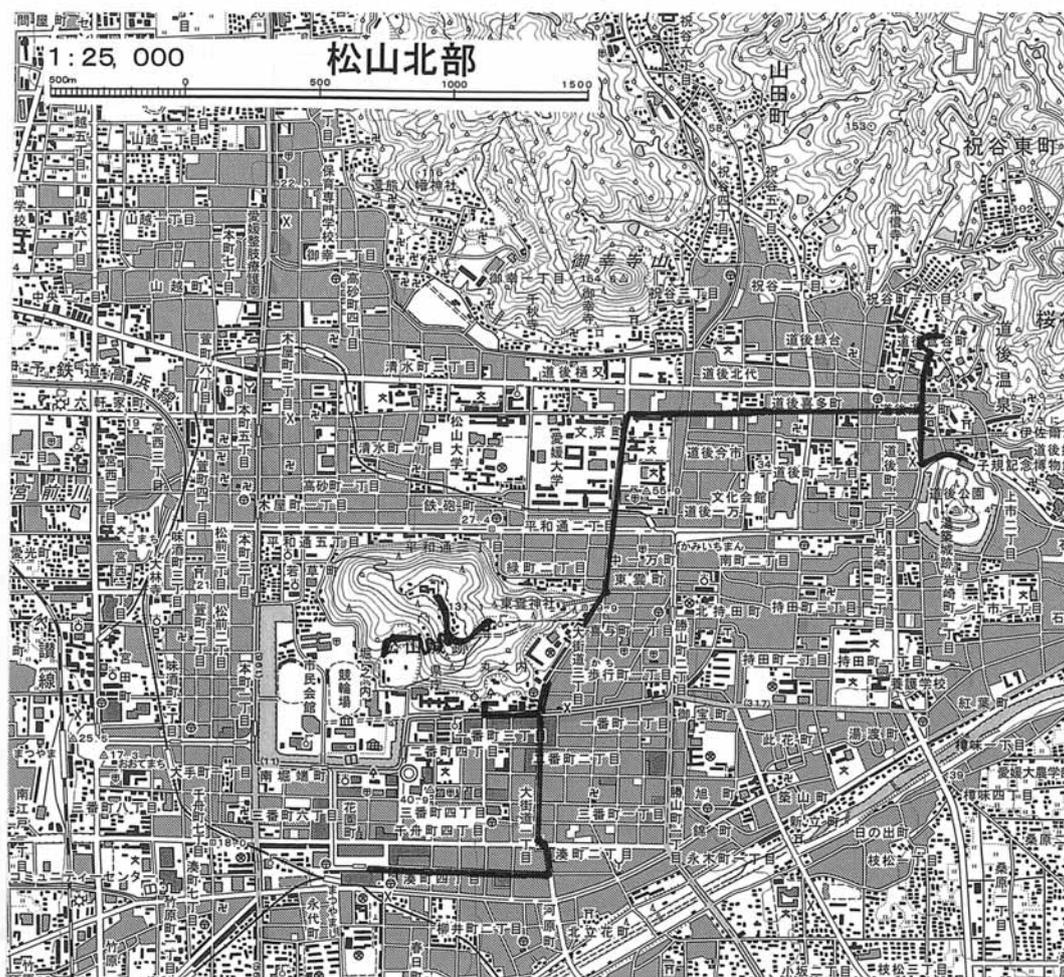


図1 第1日目と第2日目の徒歩コース

(1/25,000「松山北部」、平成17年3月1日発行をベースに一部加筆)

きには答えるようにした。

道後温泉駅に着くと、宿舎のマイクロバスが迎えに来てくれていた。この送迎バスサービスは、大学院生が宿舎手配の際に依頼してくれたものである。当初は、バス定員との関係で、数名が10分程度の道程を歩かねばならなかったが、自動車で移動している数名が遅刻したため、それが幸いして雨中に揃ってバスに乗ることができた。宿舎に向かう途中に『千と千尋の神隠し』の浴場「油屋」のモデルともいわれる道後温泉本館が見え、感嘆の声も漏れ聞こえた。宿舎到着後は、大学院生にリードしてもらって部屋割を済ませ、雨で足元などが不快な者に配慮して15分ほどの休憩時間の後、再びロビーに集合して宿舎から歩き始めた。

宿舎は台地上にあるため急坂を下る。その坂上のあたりで道後温泉や温泉街の説明をした。商店街のアーケードは西日本の商店街に多く見られる全蓋式で人の往来も多く、商店街では説明がしにくい。土産物店や飲食店など観光客向けの店舗が目立つことを商店街に入る前に説明しておき、商店街を通り抜けて道後温泉駅に至ってから、今度は「まちおこし」の戦略としてのカラクリ時計や足湯の説明をした。ちょうどカラクリ時計が動作を見せる正時(14時00分)に居合わせたのも幸運であった。

その後、電車通りに沿って少しだけ歩き、子規記念博物館に入館した。松山市は文化を発信する機能として博物館を重視しており、こうした施設の見学は市街地エクスカージョンの重要な構成要素になり得る。ことに同じ博物館で展示されている高浜虚子、『坊っちゃん』が余りにも有名な夏目漱石とともに、正岡子規は松山の文化・文学を代表する一人である。博物館に入館する頃になると雨脚も穏やかになっていたが、雨天の際の施設見学はありがたい。仮に好天であっても暑気が大変な季節では、施設見学をうまく取り入れることで、体力の消耗を未



写真1 大街道商店街
松山市を代表する中心商店街



写真2 「坊ちゃん列車」の機関車
車体をリフトアップさせて方向転換中(松山市駅)

然に防ぐことができる。見学時間は50分をとった。この博物館で見学中、自動車で松山に向かっていて遅刻組が2組とも合流した。遅刻の原因は雨天による走り難さに加えて、土日祝日が1000円均一になった高速道路の自然渋滞である。このあたり、渋滞の多発はマスメディアでも盛んに報道されていたので、出発時間の見極めの甘さが直接的な原因であると言わざるを得ない。

全員が揃ったのを確認後、徒歩で道後温泉駅まで戻り、そこから伊予鉄道市内線で大街道停留所へ向かった。ここから少し歩き、電柱地中化やカラー舗装などの市街地整備を説明しつつ移動して、今度は「坂の上の雲ミュージアム」に入館した。今年度は11月下旬からNHKで放映予定の司馬遼太郎『坂の上の雲』のロケが既に行われ、我われが訪問した折も既にロケ隊のこぼれ話の展示があった。たて続けに博物館に入館するのは決してスマートな市街地エクサカーションではないが、翌日が月曜日で博物館は軒並み休館日なので仕方がなかった。ここは建物のデザインも秀逸で、「坂の上」に登って行くかのように感じる館内レイアウトは、それ自体がアートになるような仕掛けである。都市文化を発信する拠点として、松山市が博物館を重視していることが良く分かる。

「坂の上の雲ミュージアム」を後にした頃には雨も気にならないほど小降りになっていた。我われ一行は大学院生にリードしてもらって列が長くなり過ぎないように配慮しつつ、大街道(写真1)と銀天街の両商店街に向かった。商店街内では説明が困難なため、大街道商店街に入る前に、事前学習でも取り上げられた商店街・繁華街の説明を済ませた。大街道から銀天街に入ると商店街の雰囲気が変化し、事前に学んだ内容を振り返った学生諸君も多かったようだ。銀天街を抜けたところで松山市を代表するデパートである「いよてつ高島屋」とターミナルとしての松山市駅の説明をした。都市圏レベルでは、JR松山駅よりも松山市駅を中心性が高いことを強調しておいた。

そして、第1日目のフィールドの締めくくりは、伊予鉄道が地域振興の切り札として2001年10月に運行を開始した「坊っちゃん列車」(写真2)であった。この列車は、市内線の主に松山市駅と道後温泉駅を往復しているが、我われは松山市駅から道後温泉駅までの最終列車(松山市駅17:31→17:47 道後温泉駅)を事前に交渉して貸し切りにしてもらったのである。旧来の姿を復元した列車であるため夏は暑さに耐える必要があるが、周囲からの注目度も抜群で満足感の高い移動ができる。終着の道後温泉駅には、「坊っちゃん列車」商品を扱う売店もあり、地域振興に一役買っている。列車の詳細については、中村英利子(2003)に譲る。道後温泉駅に到着後は、夕食の時間までの余裕が乏しいので、道後温泉本館に行きたい場合は翌日午後にするように指示し、夕食時間と部屋を確認したうえで駅前にて一時解散した。温泉街を団体で歩くのも無粋であるし、宿舎までの途中で土産物屋やコンビニエンスストアに寄りたいこともあるだろうとの計らいである。

夕食に先立ち、第1日目の反省と第2日目の計画に触れるミーティングを食事会場で催し、その後に夕食となった。瀬戸内の幸に恵まれた夕食はボリュームも満点で多くの学生が満足したようである。

2. 第2日目(8月10日)

朝食の後、宿舎を出て温泉街に下り、そこから針路を西にとって「にぎたつの道」を愛媛大学方面に進んだ(図1)。

天気予報によると、この日は四国全域で思わしくない予報であったが、松山市街地は終日にわたって晴天と薄曇であったため、スポット的な幸運に恵まれたといえよう。「にぎたつの道」は、古くは額田王に歌われた街道で、近世・近代には三津浜に上陸した湯治客が道後温泉との間を往来したという。往時の面影はほとんど残っていないが、道沿いに水路があり風情は相応にある。リーフレットに綴じ込んだ旧版地形図をみると、周囲が市街化していない時代の長閑さが偲ばれる。それを説明しつつ都市化した現在の景観を比べさせた。

周囲に学生向けのワンルームマンションやコインランドリーなどが増えると愛媛大学が近い。城の北側には愛媛大学と松山大学が隣接しており、城の周囲に文教地区が形成される近世城下町に特有の土地利用を説明できた。愛媛大学キャンパスを東西に分かつ通りを南に進み、やがて一行は松山城ロープウェイ乗り場に至った。その直前に一等水準点があったので、リーフレットに綴じ込んだ地形図上でその位置を示し、水準点と三角点について簡単な説明をした。第2日目の夕食兼コンパで何人かの学生に尋ねると、「中学校や高等学校で学習したが、本物を見たのは初めてだった」という者が大半であった。ロープウェイ乗り場から天守閣付近の広場までは、ロープウェイを占拠してしまうことを懸念したため、全員をリフトで登らせた。帰路は別ルートで松山城二ノ丸史跡庭園に下る計画であったため、リフト利用券は団体片道とした。

リフトを降りた場所で、全員が揃うのを待つ小休止をして、トイレ休憩を兼ねた。その後、松山城天守閣に団体券で入場したが、そこから見る絶景と天守閣を抜ける風は、汗ばんで疲れた身体に心地良かった。歴史に関心をもつ者が多いため、天守閣では1時間10分ほどの時間をとった。全員が揃った時点で下山ルートと午後からの予定を説明し、それから徒歩で松山城二ノ丸史跡庭園を目指した。この庭園は松山城の遺構を上手く残しながら、地元の特産物である柑橘類の樹木が栽培されており、ユニークな地域文化の発露に感心した。庭園出口で近世城下町の典型的な構造を説明し、ここまでで見てきたことの定着を図った。昼食時間は少し過ぎていたが、夕食時に宿舍の所定の部屋に集まることを告げ、庭園前で一時解散した。午後は個人またはグループでの自由行動とした。後述するような課題を与えている限り、京都教育大学の学生は自由時間に遊びに専念してしまうことが皆無に近いほどの熱心さを保っている。早目に宿舍に戻って、道後温泉本館を楽しんだ者も珍しくなかったようだが、ここも団体に訪れるような場所ではないし、個人や小グループでの行動は適切であったと考えられる。

夕食に先立ち、第2日目の反省と第3日目の計画に触れるミーティングを食事会場で催し、その後に必要最小限のビールで喉を潤しながら食事兼コンパとなった。学生たちに感想を求めると、こじんまりまとまった松山が総じて気に入った様子で、個人旅行として再訪したいとの意見も多かった。第2日目の午後の自由時間には、自分で決めたポイントを巡った者、市内線の全線に乗った者、マドンナバス（市内の観光スポットを自由乗降で巡る観光客向けの乗合バス）に乗った者、大街道商店街で買物を楽しんだ者など、多種多様の楽しみを工夫していた。コンパで羽目を外すと学部学生は收拾がつかなくなるので、ビールの追加は敢えて避けた。部屋に戻ってからも、極端に騒ぐ者は居なかったと理解している。

3. 第3日目（8月11日）

現地実習の終了後、直ちに帰省する者、個人旅行を続ける者もいるので、今回は朝食の後にレポート作成のための時間を1時間半ほど確保した。これは出発前から予告していたので、約4分の1の学生が現地での解散時までにレポートを提出した。残りの者がどのように過ごしていたか定かではないが、集合時間には全員が遅れることなく揃った。また、帰路後のレポート提出期限は、Eメールで添付送信の場合が8月18日の午後11時59分59秒、研究室に届ける場合は8月19日の午前9時00分としたので、これらについては改めてリーフレットに書いたものを読み上げて周知徹底を図った。

宿の従業員に見送られて宿舍を出発したのは午前10時前であった。この3日間ですっかり通いなれた高台からの急坂を下り、全員で道後温泉駅に向かった。そこから揃って松山市駅行きの市内線に乗車し、松山市駅前にある「いよてつ高島屋」屋上に設置された観覧車「くるりん」に向かう。この日は青空が眩しいほどの好天だったため、短い間であったが歩き巡った市街地を高い場所から眺めるのは格別であったろう。自動車で帰路する者を除いて、荷物が大きい学生が大半であったので、何度か「くるりん」に乗車経験のある担当者は乗車ゲートの外で荷物預かりをして全員が周回してくるのを待った。

全員が揃ったのを見計らって、今回のフィールドトリップの解散式をおこなった。この時間であれば、仮に「青

春18きっぷ」を利用しても間違いなく当日中に帰浴できる。最終日の夕方まで拘束すると、解散後も実質的に実習地に留まらざるを得ないので、ここ数年の本授業科目では解散を正午前後に設定している。

V. レポートの総評と今後の授業内容の計画—結びに代えて—

本授業科目での事後教育に相当するレポート提出に関しては、フィールドトリップの間、漫然と過ごさせないような課題をあらかじめ設け、それをリーフレットで告示することにした。かつては、夕食兼コンパの席上と解散時に告示していたが、課題を設定している方が自由行動時間の充実を図れるなど、実効的だと思われるからである。加えて、今年度は初めての試みとして、最終日の出発前にレポート作成の時間を設定した。前章で記したように、この時間の終了後にレポートを提出した学生は、全体の約4分の1に留まったが、彼らのレポートは総じて出来が良かった。記憶が鮮明なうちに取り組むことの大切さが滲み出ているとも考えられるため、今後も最終日のフィールドワークをタイトにしない範囲内で試行を重ねてみるつもりである。

リーフレットで告示した課題は、次のようなもので、これらは本稿の副題に示した3科目に共通する。

【課題】 次の3つの課題から一つを選んで、1200字以上、1600字以内で論ぜよ。

- ①松山市の中心商店街の長短所を指摘し、短所を克服するために講じるべき方策について提案せよ。
- ②伊予鉄道市内線(路面電車)にみられる現代社会への対応について数点を列挙し、それぞれについて評価せよ。
- ③道後温泉にみられる「地域おこし」の工夫について、自分が観察した具体例を列挙し、それ以外の提案をせよ。

前章で記したように、提出期限は解散から一週間後である。Eメール送信は認めたものの、レポートや論文の作成には不向きな携帯電話でのレポート作成は禁じた。携帯電話で優れた文章が書ける者も居ないわけではないが、画面に表示される字数に限界がある携帯電話では、前後の文脈との関係に配慮した文章作成は難しい。

レポートは全て期限内に提出された。全部で24人(3科目の受講生から、学部受講登録の大学院生とキャンセルした者を除いた人数)から集まったレポートを上記の①～③で分けると、①が8名、②が6名、③が9名、①～③の全てをカバーした者が1名であった。

全部のレポートの内容は書ききれないが、各々の課題において多くの同じ考えが表明されたもの、着眼点のユニークさや鋭さで注目できるものについて、課題ごとに整理しておきたい。

まず①の「中心商店街の長短所の指摘、短所の改善策」に関しては、長所として大街道商店街の幅の広い道や高い天井が多くての者から評価された。三越と高島屋が両方の端にあるため、購買客の誘導がしやすい環境も複数の者から高い評価を得た。その反面、銀天街アーケードの暗さは、この課題を選択した者の全員が何らかの表現で触れていた。天井材の工夫だけでなく店舗ファサードのデザインを改善課題として挙げたレポートもあった。また、土産物店については「多くあって松山らしい」「少なく観光客向きではない」という両極端の意見が出された。大街道も銀天街も地元居住者に育てられてきた商店街であるため、地元居住者が好む日常的な食品や小物が観光客にとっての土産になるような一層の工夫が求められよう。

次に②の「伊予鉄道市内線(路面電車)にみられる現代社会への対応」については、低床車の導入に伴う高齢社会への対応、そして「坊ちゃん列車」による主導的な観光事業への取り組みの双方が、ほぼ全てのレポートに記載された。また、頻発ダイヤによる待ち時間の少ないサービスも評価が高かった。この課題に関しては、鉄道好きな受講生が積極的に取り組んだためか、写真や参考文献を添えた力作に恵まれ読み応えがあった。ことに都市地理学で注目されているコンパクトシティやサステナビリティに触れたレポートが複数あったことは、担当者に学生たちの強い知識欲を感じさせた。旧型車輛(低床車ではない車輛)に冷房が完備していることも評価が高かったし、旧型車輛が油引きの木床であることもレトロな雰囲気があると肯定的にとらえられた。また、松山らしさが具現化したものとして、車内に小学生による俳句を掲出している車輛の存在が指摘されたレポートもあった。

最後に③の「道後温泉における『地域おこし』の工夫」をめぐるレポートでは、小説『坊っちゃん』や俳句文化の積極的な取り込み、足湯の各所への設置、レトロな雰囲気を盛り上げる人力車、土産物の充実などが多く取り上げられた。こうした一方、改善を要する点として、『千と千尋の神隠し』を活かしきれていないこと、地区のランドマークのひとつである道後温泉駅に足湯が設置されていないこと、土産物店が他の観光地と大差ない品揃えであること、明治風の装束に着替えられるサービスが定着していないこと、個人客や少人数客に対して記念

写真のシャッターサービスをして欲しいこと、駐車場の整備が遅れていることや駅前が狭いことなどが指摘された。ただ、『千と千尋の神隠し』については、「浴場『油屋』のモデルは複数ある」というのが定説でもあることから、著作権や他のモデルにも配慮して、控え目に扱わざるを得ない部分がありそうに見受けた。改善点のアイデアには「独自の温泉キャラクターが欲しいが、名前は『どーごくん』が良い」というユニークな提案もあった。

以上のように本稿では、平成 21(2009)年度のフィールドトリップの全貌を備忘録としてまとめた。担当者は従来、今回の松山を含めて訪問経験が豊富な都市や地域だけを対象に選んできた。ただ、長らく訪問していない地域では、自己の経験が色褪せていることも事実で、直近にフィールド経験をしていることが望ましい。そこで、今年度後期に大学院「社会科教育教科内容論Ⅳ(地理分野)」の一部で訪問を予定している、山口県萩市および島根県大田市(石見銀山地域)を、平成 21(2010)年度のフィールドトリップの対象地域にする予定である。「社会科教育教科内容論Ⅳ(地理分野)」の現地実習は1泊2日の行程なので、2泊3日の行程に拡大するフィールドトリップでは島根県津和野町も対象に加えたエクステンシブ型を模索中で、津和野については今年度12月に実施する「社会科教育教科内容論Ⅳ(地理分野)」の現地実習に先立って前日に現地入りし、下見を済ませておく計画も立てている。

参 考 文 献

- 荒木一視 (2000) 「わが国の青果物流動体系からみた地方中堅スーパーA社の青果物流通戦略—松山都市圏の事例を中心に—」、地理科学、55-1、pp. 27-46.
- 土居晴洋 (1984) 「市街地周辺地域における土地利用変化の分析—松山市南郊を例として—」、人文地理、36-1、pp. 1-21.
- 藤目節夫 (1999) 「歴史が息づく四国の中心都市」、(平岡昭利編『中国・四国 地図で読む百年』、古今書院) 所収、pp. 149-156.
- フンク・カロリン (2000) 「瀬戸内海観光地域の形成と変容」、地理科学、55-3、pp. 181-191.
- 城所哲夫・片山健介 (2007) 「地方中核都市における都市再生政策に見られるローカル・ガバナンスの構築プロセスに関する研究」、都市計画論文集、42-3、pp. 253-258.
- 香川貴志 (2003) 「東京を歩く—地下鉄銀座線沿線のフィールドトリップ、平成 14(2002)年度『地理学臨地実習』『地域環境学臨地実習』の覚え書き—」、京都教育大学教育実践研究紀要、3、pp. 27-38.
- 香川貴志 (2005) 「道央探訪—平成 16(2004)年度『地理学臨地実習』『地域環境学臨地実習』の覚え書き—」、京都教育大学教育実践研究紀要、5、pp. 33-43.
- 香川貴志 (2007) 「長崎ば、さるかんね—平成 18(2006)年度『地理学特講 (地理学臨地実習)』『地域環境学臨地実習』の覚え書き—」、京都教育大学教育実践研究紀要、7、pp. 1-10.
- 香川貴志 (2009) 「函館・札幌・小樽のエクステンシブ型フィールドトリップ—平成 20(2008)年度『地理学特講 (地理学臨地実習)』『地域環境学臨地実習』の覚え書き—」、京都教育大学教育実践研究紀要、9、pp. 1-10.
- 片山才一郎 (1961) 「今治平野の条里と伊予国府」、人文地理、13-2、pp. 42-48.
- 川久保篤志 (1996) 「オレンジ果汁輸入自由化による産地の変貌—愛媛県周桑郡丹原町を事例に一—」、人文地理、48-1、pp. 28-47.
- 川久保篤志 (2006) 「西日本の柑橘栽培—愛媛県における品種開発と産業振興—」、地理、51-10、pp. 42-48.
- 菊池一夫 (2003) 「『まち』のイメージ研究—『まち』(松山市大街道商店街と銀天街商店街)の来街者イメージ—」、IRC 調査月報、180、pp. 24-31.
- 窪田重治 (1992) 『城下町松山と近郊の変貌』、青葉図書、359p.
- 國原幸一朗 (2005a) 「松山と日露戦争—ロシア人捕虜収容所とロシア人墓地—」、地理、50-10、pp. 67-69.
- 國原幸一朗 (2005b) 「松山と太平洋戦争—海軍基地・掩体壕・防空壕—」、地理、50-10、pp. 70-73.
- 國原幸一朗 (2006) 「愛媛県の市町村合併を考える」、地理、51-4、pp. 62-67.
- 松岡恵悟 (2001) 「松山市における近年の大型スーパーの立地動向からみた商業地域の変容について」、季刊地理学、53-2、pp. 127-131.

- 松岡恵悟(2002)「城下町松山の海の玄関口—歴史と文学をたどりながら三津浜から高松をあるく—」、地理、47-5、pp. 90-95.
- 森 征洋・林 宣之(2003)「愛媛県高縄半島周辺における海陸風の特徴について」、香川大学教育学部研究報告 第I部、53-2、pp. 95-108.
- 向井浩司(2008)「松山圏域における企業の社会的責任(CSR)の取り組み状況について」、ECPR、24、pp. 57-64.
- 村上節太郎(1975)「松山・道後」、(山口恵一郎ほか編『日本図誌大系 四国』、朝倉書店)所収、pp. 196-205.
- 中村英利子(2003)『走れ、坊ちゃん列車—日本初の軽便鉄道ものがたり—』、アトラス出版、140p.
- 関戸明子(1994)「焼き畑山村における林野の社会的空間構成と主体的土地分類—愛媛県面河村大成を事例に—」、人文地理 46-2、pp. 144-165.
- 芝 翼・大隈 満(2004)「柑橘農業における非破壊選果機導入の効果—愛媛県を事例として—」、愛媛大学農学部紀要、49、pp. 43-50.
- 白石喜春(2007)「地方中心都市都心部における低・未利用地の立地増大とその要因—松山市・高松市中心部の空地利用比較を通じて—」、地理科学、62-2、pp. 65-78.
- 高橋治郎・山崎哲司(1992)「松山市東方の和泉層群中に発達する褶曲 I・II」、日本地質学会第99回学術大会講演要旨、pp. 328-329.
- 立田浩之(2004)「近年の道後温泉宿の選好要因分析」、松山大学論集、16-4、pp. 155-193.
- 寺谷亮司(2003)「松山市の都心盛り場(1) —歓楽街を中心とした地域特性と近年の変化動向—」、IRC 調査月報、185、pp. 22-36.
- 寺谷亮司(2003)「松山市の都心盛り場(2) —歓楽街を中心とした地域特性と近年の変化動向—」、IRC 調査月報、186、pp. 34-51.
- 寺谷亮司(2007)「日本都市における都心盛り場の構造と発達—その立地モデルと松山市の歓楽街を中心として—」、(長谷川典夫先生喜寿記念事業会編『地域のシステムと都市のシステム』、古今書院)所収、pp. 259-274.
- 堤 純(2001)「人文・社会系大学教育におけるパソコン版 GIS の活用—松山市中心商店街における土地利用調査を事例として—」、愛媛の地理、15、pp. 26-38.
- 堤 純(2006)「土地利用変化からみた松山平野の陸域環境変遷—GISによる100mグリッド解析(1905-1997年)—」、愛媛の地理、18、pp. 67-72.
- 和田耕治(2008)「中心市街地活性化の新潮流—まちづくり、中小小売業の支店を中心に—」、嘉悦大学研究論集、51-1、pp. 1-16.
- 山脇秀元(2005)「龍沢泉の整備—住民主体の農村水辺環境整備—」、農業土木学会誌、73-4、pp. 315-316.
- 安倉良二(2007)「愛媛県今治市における中心商店街の衰退と仲間型組織による再生への取り組み—『今治商店街おかみさん会』の活動を中心に—」、経済地理学年報、53-2、pp. 173-197.